

佛 教 研 究 第貳卷 第壹號

西藏文俱舍論破我品譯

寺 本 婉 雅
山 口 益

本稿は大谷大學圖書館藏の丹珠爾部第六十四函顯藏章句釋 (P. a. 84a. 100) 即ち世親造阿毘達磨俱舍論の「破執我品第九」(Gan-Zag dGag-pa bStan-pa Shee-Bya-bru mDzod-kyi gNas-dGu-pa) の翻譯である。

この翻譯は大正四年四月大谷大學に初めて西藏語西藏文學課程の開かれし、その翌年の春、最初の講本に供せられしものに基づく。當時私は聽講の一員として、寺本先生の御講讀あるに隨つて之を譯述し、更に先生に御願して原文及玄奘譯俱舍論と對照の上特に嚴密な御校正を賜つた。大正六年春某書林に託して刊行を企て既に南條先生、舟橋、泉雨先生から序文を賜つたに拘はらず、其後書林の都合により中絶するの已む無きに至つた、諸先生に對して誠に申譯ない次第である。今茲にその序文を其儘卷頭に掲げて本譯の光榮を深謝せんとしたけれども、本誌掲載の都合上之を略するの已む無きに至つた。諸先生に對して重々御詫び申さればなりません。

此度本誌に掲載するに際し、參考の爲眞諦譯俱舍釋論破我品の論文と對照するに、藏譯の文々句々は玄奘譯以上に舊譯と一致する點多きを見、譯語、譯文の上に於て舊譯のそれに依用せねばならぬものあるを見出した事一二にして止まらぬ。由てか

ゝる點は漢譯二本の外、藏文耶輸密多羅及富樓那波爾陀那の釋論をも參照し、隨處に改譯訂正を敢てした。譯文に生硬な直譯體そのまゝを用ひたのは漢譯文との對照上、譯文の上に西藏原典の色彩を浮ばしめん爲であるこゝを斷つておく。實は破我品全部少くとも憤子部を破する部分の終までを一度に、掲載し度いのであるが本誌の都合上憤子部を破する部分も四種の無記說と輪廻と憶念記知との問題に關する部分は次回に譲らねばならぬこゝとなつた。更に一度寺本先生の御校閲を頗度く思つて居たけれど時日が許さなかつたのは残念である。(益)

緒 言

梵本の俱舍論には耶輸密多羅釋論一種を存するに止まり、漢譯には新舊の同本異譯二本の存するに過ぎずして、聰明論として印度末期の敎學界に其名の稱へられた跡の見られ得べくも無いが、西藏本には本論、本頌別行及び諸釋論合せて十種を現存し、陳那、安慧、等敎學界に重きをなしたる人々の手になりしもの以て印度佛敎末期の敎學界に於て影響瑣少にあらざりしを想ひ起さしむるに十分である。此等は何れも梵語より藏語へ翻譯せられたもので西藏々經丹珠爾部へ編入せられてある。今此を列舉せば、

一、阿毘達磨俱舍頌

abhidharmakośa kāvīkā (Original text^o Kōśā)

Chos-mNon-pahi mDsoḍ-kyi Thsig-Leḥur byas-Ba

著者 世親 (dByig-gNen; Vasubandhu)

譯者—印度人勝友(Jinamitra)と西藏人大校正翻譯家ワンデー・バルツェク (Bande dPal-lRtsegs)

との共譯。

眞宗大谷大學圖書館藏、丹珠爾部第六十三函 1-27^b

二、阿毘達磨俱舍論

abhidharmakośa bhāṣya (O. °dharmaśāstra bhāṣyam)

Chos-mNon-paḥ mDsoḍ-kyi bCād-pa

著者—譯者 (一)と同人

丹珠爾部第六十三函 (27^b-302^a) 第十六四函 (1-109^a)

三、阿毘達磨俱舍論頌精釋

abhidharmakośa gāṣṭra kārīkā bhāṣya (O. dharmakośa kārīkā gāṣṭra bhāṣyam)

Chos-mNon-paḥ mDsoḍ-kyi bStan-bCos-kyi Thsig-leḥur Byas-Baḥi Rnam-par bCād-pa

著者—調伏賢 (bDul-bZaṅ ; vinitabhadrā)

譯者—記載無し

第六十四卷 (109^a-304^b)

四、阿毘達磨俱舍註釋

abhidharmakośaṭīkā (O. tilka)

Chos-m^チNon^ノ-pa^ハ mDso^メd-kyi^キ bGrel^グ-bGad^ダ

著者—稱友 (Grags-Paḥi bCes-gNen; Yaçomitra; 耶輸密多羅)

譯者—印度人^{ビシエドハ・シンハ} (Viçuddhasimha) と、西藏人大校訂譯家^{ワンデー・バルツェク} (Bande dPal-Rtseg)。「本書は八萬八千頌、六十章より成る」とあり。丹珠爾部後編第六十五函、六十六函全部を含む。

五、阿毘達磨(俱舍)摘要

Abhidharma samuccaya bhāṣya (O. dharma...ccha...syam)

Chos-m^チNon^ノ-pa^ハ Kun^ク-Las^ラ bTus^ツ-paḥi^ハ bCad^ダ-Pa^ハ

著者—勝子 (Rgyal-Baḥi Sras; Jinaputra)

譯者—勝友と西藏人^{シーレンンドラ・ボムツ} (Siendura bodhi) と、^{ワンデー・イーシー・デー} (Bande Ye-ces Sde)

丹珠爾部後編、第五十七函 (一四三) に編入。

六、阿毘達磨(俱舍)摘要精釋

abhidharma samuccaya vyākhyā

Chos-mNon-pa kum-Las bTus-Pahi Rnam-par bGad-pa

著者—五と同じ

譯者—勝友と西藏人ワンデー・イーシー・デー第五と同函(143^b-32^a)

【眞宗大谷大學藏北京版には「顯藏諸經摘要」との漢文の見出しが誌してあるから、兩書共に Abhidharma samuccaya でありて、藏卽俱舍 kosa = mDsoḍ の辭は無いけれども、共に阿毘達磨俱舍に關するものたるに違ない。従つて、著者勝子 (Rgyal-Bahi-Sras; Rājaputra) といふも、コルデイルの注意せる如く王子 (Rgyal-Bohi-Sras; Rājaputra) 卽耶輸密多羅のことにあらざるか。兩書共十章より成りて、漢文の見出しの示すが如く諸經摘要であり、俱舍本論と直接の關係がある様に見えぬ。従つて破我品論文譯を中心としての本研究には之を參考するまでに至らなかつた。】

七、阿毘達磨俱舍釋廣疏

Abhidharmakośa bhāṣyaṭīkā tattvārtha (O. °dharma .tatvartha)

Chos-mNon-pahi mDsoḍ-kyi bGad-pahi Rgyal-Cher hGrel-pa Don-Gyi De-lkho-na-Nid

著者—安慧 (Blo-Gros bRtan-pa; Sthiramati)

【通常安慧は sthiramati で s'thiramati は堅慧又は堅意と譯されて居るが、慈恩は梵悉恥羅末底

sñiramañi、唐云安惠（唯識述記一、十二）と云ひ、賢首は堅慧は梵に娑羅末底（sāramati）と名くと云ふて居る】

譯者—西藏沙噓^{シヤール}地の翻譯家ダルマ・バラ・ブンドラ（Dharmapālābhadrā）。

丹珠爾部後編第二百二十九及び百三十函全部に編入。本書は一名虛空金霹靂（gNam-lcags Thogs-Zer; Karakāṇi）と名けられ、「定品第八處」のみにて完結す。

八、阿毘達磨俱舍註釋名義隨順

abhidharmakośaṭīkā lakṣaṇānusārīṇi nāma (O. lakṣaṇasyanusari nama)

Chos-mNon-Paḥi mDsoḍ-kyi ḥGrel-bḥCad mThsan-Nid-kyi Rjes-su ḥBran-Ba

著者—富樓那婆爾陀那（Pūrṇavardhana; Gañ-Ba Spel-Ba）

譯者—カナカ・ヴルマ（Kanakavarma）、及び西藏人翻譯ニマ・チャクン（Ni-Ma Grags-Pa）と

共譯。丹殊爾部「後」の第六十七函と同第六十八函との全部及び第七十函（P. b 286-a 315）に編入す。

九、阿毘達磨俱舍註釋心髓燈

abhidharmakośa vitti marmapradīpa nāma (O. dharmamarmapradīpa Nāma bhitti)

Chos-mNon-Paḥi mDsoḍ-kyi ḥGrel-Ba gNad-Gyi Sron-Ma.

著者—陳那 (Dinaga: Phyogs-kyi Glan-po)

譯者—瑜伽梅陀羅 (Yogacandra) 西藏人翻譯家シヤム・ン・シ・ン・ヌ (hJam-dPal gShon-Nu)

この共譯。丹殊爾部第七十函 (P. a 144-a 286) に編入す。

十、阿毘達磨俱舍註釋緊要經較義

abhidharmakosāṭikā upāyikā nāma (O koṣāpayi a Nāma-tika)

Chos-mNon-Pa mDsoḍ-kyi hGrel-pḥad Nei-Par mKho-Ba Shes-Bya-Ba mDo-Dan Shyar-Ba.

著者—寂靜天 (Shi-gNas Lha, Yamathadeva)

譯者—印度人ジャヤ・シハリ (Jayacū) 西藏人翻譯家セラブ・オンゼン (Ges-Rab Hod-Zer)

この共譯。丹殊爾部後の第六十九函 (P. 1-296) 同第七十函 (P. 1-414) に編入す。

破我品は世親が俱舍論前八品中處々に於て、世親傳に示すが如く「經量部の立場より有部の教義に批判を加へた」其同じき立場を以て、犢子部及數論勝論の有我思想を論難し、從つて世親の宗とせる小乗思想の最も明かにせられたるもので、普光が前八品を所依の事とし、第九品を能依の理とせる如く俱舍製作の要論であり、更に小乘有部經部より唯識二十論へと關聯せらるべき世親の教學上重要な過程をなし、尙史上に於ては、印度諸論師の間常に一部の問題とせられ、處々の論釋に散

見せる「犢子部非即非離蘊我」の詳細に論せられたものであるから、佛教史上重要な文献と認められねばならぬ。

然るに此一品が前八品に於ける如き俱舍論の形式を取らざると、眞諦譯論の定品末より今品へ移る文體に錯誤の存するとの爲に破我別論の議起りて、最近まで俱舍學者の間に甲論乙駁せられたるは世既に周知の如く、豐山の快造が俱舍論法義卷一に三分を辨別するに當り、前八品と此品とに各序正流の三分を立て、眞諦譯 (A.D. 561) 俱舍釋論に大師世間眼等七言三頌の前に「破說我品」の題號あるを重視する結果、定品終、迦濕彌羅等の七言一頌を流通となし、中間五言六百行頌を正宗とし、此總てが世親傳の所謂、迦濕彌羅に遣られたる本頌にして又彼國諸師の爲に釋せし所なりとし、彼定品末大師世間眼等の七言三頌を破我論の發起序とし、之に六因を上げ、理教の由を以て破我別論の由を論じ、此自らの推論論證の爲に舊譯俱舍論を用いて「誰敢異求之耶、應理之義冥合聖教」と言るに始まり、爾來豐山系は別論を、智山及泉山系は之に反對説を主張するに至り、或は此兩説を折衷して破我品を以て俱舍論の附録と會通せんとしたのもあつた。併し左に引證するであらう如く、前上眞諦譯の俱舍論の形式は西藏文諸本より見る時は全く誤まれたるものであるから此舊論を重用視しての快道の説も亦其根據の失はるべきものと言はねばならぬ。

さて前に掲げたる如き浩瀚なる諸論釋疏の内容に尋ね入ることは固り容易の業でないが今其一二

に就いて之を見るに藏譯の俱舍論頌には、「對法藏頌中定教第八處」の終りに「師世間眼は閉ぢたり」の三行頌あり。又藏譯の俱舍論には下記本譯に載する如く「對法藏釋」中「入定教第八處」の完結に次で「對法藏」中「破我教と名くる俱舍の第九處」と記されてあるから、此三行頌を破我品の序分なりとする事はできない。是は前八品の結文なりと見做すこと至當であらう。されば是に由て藏譯の俱舍論は其組織に於て玄奘譯 (A.D. 651-654) の全然一致するを見る。

今上に列舉せし藏譯俱舍諸釋論中耶輸密多羅「俱舍論註釋」には、「大師世間」云々の三行頌釋は定品の終りに在り。曰く「Tshig-Hdi-La Nes-Par-Zin-Pa Gan-Yin-Pa-De Ni-bDag-Gi Nes Te bDag Gi Skyon Yin No. Ciji-Phyir She-Na, Dam-Chos Tshul La Tshad-Ma Thub Ruams Yin Shes-Bya-Ba Smos To. RTogs-Pa Dan l un Gi mTshan-Nid kyi Dam-Pahi Chos Kyi Tshul La De bRjod-Pa La Tshad-Ma Ni Thub-Pa Sais-Rgyas bCom-Ldan-ñDas Ruams Dan, Sais-Rgyas Kyi Sraś hPhags-Pa Cha-Rñ-Bu La-Sogs-Pa Yin Te, Chos Thams-Cad Ruam-Pa Thams-Cad Tu RTag-Par Bya-Ba La Thugs-bCuḡ-Pa Dag-Ces-Bya-Bahi Tha-Tshig Go. STon-Pa hñig-Rten Mig Ni Zum Gyur Cin She-Bya-Ba Ba Ni hñig-Rten Gyi Khams Kyi Mig-Tu-Gyur-Pa Lam Dan Lam-Ma-Yin-Pa Van-Dag-Par STon-Par Byed-Pa bCom-Ldan-ñDas Yons-Su Mya-Nan Las-ñDas Qin Te此語の中、過失に畢れる所のものは、我の過、我の失なり。何故ぞ

と言ふならば、勝法の正路に於て量なるものは諸牟尼なりしと言はるゝこと説かれたり。解と教とを相性とせる勝法の正路の宣説に於て量たるものは諸牟尼覺者世尊と、覺者の子聖舍利子等にして一切法(と)一切種とに於ける所觀に入心せられたる人々等と言はるゝ言葉なり。大師世間眼は閉ぢたり」と言はるゝは、世間界の眼となりて道と道にあらざるを正しく教ふる世尊は般涅槃せり……又三行頌釋の後には「……Cos-m'Non-mDsoḍ Kyi hGrel-hQad Doñ-Gsal-Ba She-Bya-Ba Slob-dPon RGYal-Poñi Sras Grags-Pañi bCes-Gñen Gyas mDsaḍ-Pa Las-Sñoms-Par hJug-Pa bStan-Pa She-Bya-Ba Ste mDsoḍ-Kyi Gnas bRgyad-Paḥo.; 對法藏の註釋明義と名けらるゝ論師王子稱友によりて造られる中にて、「入定教」と名けられて俱舍の第八處なり」と云ひ、次に Bam-Po Drug-Cu-Pa. Yan Ci hdi Las gShan La Thar-Pa Yod Dam Shes-Bya-Ba Ni Thar-Pa hDod-Pa Dag gis Bag-Yod Gwis Shes hByuñ-Bas Don Gwis Na Slob-dPon Gwis hDi Kho-Na Thar-Pañi Thabs Yin Gwis hDi Las Thar-Pañi Thabs gShan Med De.; 第六十章。又これより他に解説有りや否やと言はるゝは、解説を願ふ者によりて不放逸なれと現はるゝが故に、義を以て論師によりて、此のみ解脱の方便にして此より他の解脱の方便無し。」と本釋論最後の章段を上げて、此より他に解脱云々と云へる解脱は、直前に「解脱を願ふ者によりて」と云へるを受けて、破我品の由來生起が前定品と不可離の關係にあるを示し、而して破我品の終りには『mDsoḍ Kyi Gnas

bRgyad-Pa. Daiḥ brel-Ba Gañ-zag Kham-Par GTan-La ḥBeb-Pa ḥdi Yai Rdsoḡs So.; 「俱舍の第八處」と相屬する「補特伽羅を完全に刊定する」此は又完結す』とあり、而して次に少しく文ありて、最後に釋論全部の終りとして、『Cos-mñon-Paḥi mDsoḡ Kyi ḥGrel-bḡad Don-gSal-Ba She-Bya-Ba Slob-dPon Rgyal-Poḥi Stras Grags-Paḥi bḡes-gñen Gyis mDsoḡ-Pa mRdsogs So.; 對法藏の註釋明義と名けらる。論師王子耶輸密多羅の造は完結す（丹珠部第六十六函顯藏解 P. 378）』と示す。

先に一言せる如く梵本俱舍本論は發見せられないが唯耶輸密多羅の「俱舍論精釋」一部をのみ存する。余（寺本）はその原本を所藏せないから、曾て萩原雲來氏に全書卷末の調査を乞ふて、梵本にては破我品は別論でないことを確むるを得た、此に同氏に謝意を深く表する。梵本精釋に據れば、「大師世眼」云々の三行頌と、次の「破我品」の初の文句の之間に何等の文句を挿入せず、即ち上記の西藏文に相當する定品結末の題號はないが、「破我品」の終りの處は藏文と全然同じ、即ち Samāpta's aśīama-kośa-sthāna-saṃbaddha eva pudgala-.....とあり、次に全部の終りの文は藏譯と異にして第八品の終りとして。謂へ ācārya-yagomitra-kṛtāyāṃ sphuṭārthāyāṃ abhidharma-kośa-vyākhyāyāṃ aśīānaṃ kośa-sthānaṃ samāptam iti. とあり。即梵本釋論は「破我品」を以て第八定品中に攝し、藏本釋論は第八定品と相屬されて存すべきなるを示してゐる。

更に列舉せし藏本十種俱舍論中、主なるものを一瞥するに調伏賢所造の俱舍論頌精釋は、其名の示す如く頌文のみの釋疏なるが故に、本頌の無き破我品に就ての釋はなく、定品の精釋にて終れるが、其終末に「迦濕彌羅の義理成する」の七言一頌を存し、最後に「大師世間眼」の七言三頌を存して、快道の所謂「大師世間眼」の頌が破我論の發起序たるの傾向無く（丹珠爾、後編六十四函、p. 303b）富樓那波爾陀那の釋疏、又「大師世間眼」七言三頌の次に、『對法藏の註釋名義隨順と言はるゝ中にて、定に入る教と言はる第八處の註釋なり』と定品を終りて破我品の註釋を始め、（丹珠爾、後、六十八函 p. 365 a）破我品の最後に於ては釋友の精釋と同く、「mDsod Kyi Gnas bKgyad Pahi Shal La Byun-Bar lBrel-Ba Gai-Zag Rnam-Par Gtan La lBebbs-Pa Rdsogs So; 俱舍の第八處に繼起して相屬する補特伽羅を判定すること完結す」と言ひ（後、六十八函 p. 390 b）、陳那の俱舍註釋心髓燈には定品の終及び破我品の初めに於ける文は本譯に掲ぐる俱舍本論と同じく、破我品の終に於て又同じく、「Gai-Zag bStan-Pa She-Bya-Ba mDsod Kyi Gnas dGu-Pajo; 補特伽羅（の）教と言はるゝ俱舍の第九處なり」と完結してゐる（丹珠爾、後第七十函 p. 286 a）。

前上十種の諸釋論中五、六の二本は先に一言せる如く俱舍論文と直接關係なきものなるを以てこれを引證するの必要を有せないが、第十即寂靜天の書は俱舍論に引用せられたる契經文の重なるものを上げて、其經文の前後の文をも詳細に上げた特殊なる註釋書であつて、吾人は本譯中數度之を

繙くのを必要を有つたが、この註釋書に於ても破我品の部分を包括し破我品を以て第九品に數へて居る。但第七安慧の廣大疏は定品末にて完結して居るが、七言三頌は固り定品末に屬して居る以上、此一書のみを以て他の全部を否認する丈の理由を認めない。寧ろ此書も稱友や富樓那波爾陀那等が「定品第八と繼起相屬せる破我品」として定品との不可離を示せるものと何等かの關係有るものにあらざるか、此は此廣大疏に對してより廣く尋ね入るべき他日を期せねばならぬ。

かくの如く梵本藏本何れより見るも、「破執我品第九」の題號が「大師世間眼」の前にありて、其七言三頌を發起序とせんとする眞諦譯を底本としての破我別論説は畢竟原本を見ざるより惹起せし附會説たるに過ぎない、快道は新譯の形式を以て誤まれる梵本よりの翻譯とし、「爾來梵本錯濫遂令譯爾」と新譯を貶するが、梵藏兩本よりの研究は寧ろ舊譯こそ誤まれる組織の梵語原本よりの翻譯か或は支那傳譯以後の寫誤より來れるかを想はしめられるのである。併しそは固り、七言三頌の位置のみの問題であつて、全體の譯文に於ての問題でないことは申すまでもない。

尙古來より漢譯俱舍論は甚だ難解であつて人々の見解に隨つてその句讀點を異にし、又本文其ものに就いて隨分怪しい個處も存して研究者を苦しめたものであるが、これらは原典の比較研究によりて容易に氷解せしめられる。これは本譯稿の隨處に於て出來る丈け挾註の中に之を指摘しておいた。

藏譯俱舍論は勝友 (Jinamitra) と西藏人大校訂譯家ワンデーバルツェク (Bande dPal-Rtsags) との共譯に依る。此勝友は一名ニャーヤ、ビンドウビンダールトハ (Nyayabindupindārtha) と稱す。藏王 チーラルバ・チャン (khril-lar-ba Can; A.D. 864 の出世) 時代にサルヴ・ジュニャデヴ (Sarvajñadeva) と、ダーナ・シーラ (Dinasila) 等の多くの班抵達と俱に來藏し、梵本より諸經論を多く藏譯した。藏譯の波羅提木叉經 (So-Sor Thar-Pa; Pratimokṣa-Sūtra) はその一である、然かし漢譯の「根本薩婆多部攝十四卷」の著者勝友 (Jinamitra) は、最勝子、智月、と俱に護法門下の人で唯識十大論師の一人であつて、漢譯上の勝友は紀元七世紀頃の出世であるが、西藏の譯家勝友は九世紀前半の人であるから固り別人である。

本譯「破我品」の前に「大師世間眼」の文を添加したるは、俱舍論定品末にある有名なる「大師世間眼久已閉」の文は、破我品は別論なるや否の諍論に關して古來より重要な文證なりとせらるゝが故に、西藏原文のその一節を抄譯して、研究上便宜の爲め茲に翻譯せる「破我品」の前に添入した。

【眞諦譯俱舍論定品】

(縮藏、卷二、三十二右)

此論中、佛世尊阿毘達磨、是我所說、爲如經部

【玄奘譯俱舍論定品】

(佐伯旭雅本、卷二十九、八右)

此論依三攝阿毘達磨爲下依何理釋對法上耶頌

【西藏文和譯】

論は此阿毘達磨 (Chos-roṅ-pa) によりて釋すと言ふは、論は阿毘達磨によりて釋す也。雖も此 (阿毘達磨) のみに從つて釋するや。こ

中所顯、爲如毘婆沙中所顯、偈曰、

闍賓毘婆沙理成

我多隨彼說此論

正法偏執是我失

判法正理佛爲量

釋曰、闍賓國毘婆沙師、

二證所成就、此阿毘達磨、我今多隨彼義說、於中

若有偏執、是我過失、離

證能正判正法、唯佛世

尊爲最勝量、何然故、由

證見一切法故、若佛聖

弟子、離阿含及道理、

判正法亦非中量

【阿毘達磨俱舍釋論卷

第二十一

阿毘達磨俱舍釋論卷第二

十二

婆數盤豆造

西藏文俱舍論破我品譯

曰、

迦濕彌羅議理成

我多依彼釋對法

少有貶量爲我失

判法正理在牟尼

論曰、迦濕彌羅國毘婆沙

師議阿毘達磨、理善成

立我多依彼釋對法宗、

少有貶量爲我過失、

判法正理唯在世尊及

諸如來大聖弟子、

大師世眼久已閉

堪爲證者多散滅

不見真理無制人

由鄙尋思亂聖教

自覺已歸勝寂靜

持彼教者多隨滅

世無依怙喪衆德

無鉤制惑隨意轉

既知如來正法壽

れのみに從つてなり。

我の此阿毘達磨は大概

「迦濕彌羅 (Kia-Chie) の毘婆沙 (Bye-

Brag-Tu Smara-Ba) の方法(理)に於

て成就せられたるもの」を釋せるなり。

此中過失に畢れるものは我によりての過

失なり

正法の理の量(正理を證明するもの)は諸

牟尼なり。

我によりて此阿毘達磨は、大概迦濕彌羅の毘

婆沙等の方法に於て成就せられたるを釋せる

なり。此中我によりて過失に畢れる所のもの

は我の過失にして、正法の理の量たるものは

佛と諸の佛子のみなり。

師世間眼は閉ぢたり

現(作證)せし士は大概滅盡せし故に

真理を見ずして放縱になれる

諸の惡解によりて此教は擾亂せられたり

自ら得達せし(佛)と教を勤めて住持する

ものとは

陳天竺三藏真諦譯

破說我品第九】

大師世間眼已閉

又證教人稍滅散

不見實義無制人

由不如思動亂法

自覺已入最妙靜

荷負教人隨入滅

世間無主能壞德

無鉤制惑隨意行

若知佛法壽

將盡已至喉

是惑力盛時

求脫勿放逸

離此法於餘法爲無

得解脫耶、無、云何如

此、非、如我見誑於心

故、何以故、彼人不於

五陰相續中假立我言

故、何爲由彼分別有別

漸次淪亡如至喉

是諸煩惱力增時

應下求解脫勿中放逸上

【破執或品第九六一】

越此依餘豈無解脫

理必無有、所以云何、虛

妄我執所迷亂故謂此法

外諸所執我非即於蘊相

續假立、執有真實離

蘊我故、由我執力諸煩

最勝寂靜に去きて世間は主なき故に訓

戒無く、功德を毀壞する

垢によりて歡樂して今此(世間)に行ず。

その如く牟尼の教は

咽喉に壽命の到れるに等しく、諸垢

力を具有するの時なりと知りて

解脫を希ふものによりて不放逸なれ。

【對法藏論の中に「入定教」と名くる此藏の

第八處」は完成す。】

又此より他に解脫有りや否や、曰く無し。

何故にと言は、我 (Paṇḍita) を見ることは顛

倒 (Phyṇ-Chi-Log; 云何なる到達も不正) を

貪望する状態なるが故なり。蘊 (Phu-Po) の

相續 (Gyud) のみに於て我を假設するは確實

に執持せざるなり。爾らば何の謂ぞや、唯他

實物「名我、一切或以「我執」爲「生本」故、餘法無「解脫義」、云何得「知」如「此但於「五陰相續中」、假「起我言」、非「於餘義」、由「我非」證比「二量所知」故、餘法若實有若無「障礙」、必定由「證量」得「知」、譬如「六塵及心」、或由「比量」得「知」、譬如「五根」、此中如「此比知」、若有「因緣」、餘因緣不有故、不見「事生」、若有則見「事生」、色塵等緣若具有、能障礙法若悉不有、盲聾等人及非盲聾等人、於「色等塵」眼等識不生、故可得「比量」別因不有義、別因即是眼等根、如此證量及比量、於「我不有故」、是

惱生三有輪迴、無容「解脫」、何以爲「證知」諸我名唯召「蘊相續」、非「別因」中我體、於「彼所計離蘊我」中無有「眞實現比量」故、謂若我體別有「實物」、如「餘有法若無「障礙」應「現量得如「六境意」、或「比量得如「五色根」、言「五色根比量得」者如「世現見」雖有「衆緣」由「闕」別緣「果便非」有、不闕便有如「三種生芽」、如是亦見雖有「現境作意等緣」、而諸盲聾等識不起、定知別緣有「闕不闕」、此別緣者即眼等根、如是名爲「色根比量」、於「離蘊我」二量都無、由「此證知無「眞我體」

の實質を我なりと認知し、諸煩惱は我を執するによりて生起するなり。」「我を明に説くことは是れ蘊の相續に入るに由つてのみ、他の所説の中には存せず」と言はるゝ此を云何に了悟するや、曰く、現量 (mNōn-Gsum) と隨量 (Rjes-Su dPag-Pa) と無き故なり。凡そ存在する所の法に於て遮斷する無くば、現前に緣 (dMigs) するなり。例せば六境 (Yul-Dug) と意 (Yid) との如し。或は又隨量に由つて緣す例せば五根 (dBan-Po) の如し。彼 (五根) に於て此は隨量なり、因ありとも別の因無くば果無きを見、而して (別の因) 有れば又 (果) 有るを見る、例へば芽の如し。現はれたる境と意作の因 (Rgyu Yid-La-Byed-Pa) と有りて雖も、境を執ること無きを見、或は又有るを見る、盲と聾等と、不盲と不聾等の如し、其故に其處に別の因無 (Med-Pa) と有 (Yod-Pa) とは確實にして、其別の因なるものは根なりと言はるゝ此は隨量なり。其如く我は有るにあらざるが故に我無し。

故說決定無我

是跋私弗多羅部所說、

必定有我、與三五陰不

一不異、此言宜應簡擇

爲下彼執中由實物故有、

由假名故有、實有相云

何、假有相云何、若如色

等別有、名實有物、若

如乳等、但聚集有、名假

名有、若由實物有與

陰別性故、應說與陰

有異、譬如別別陰、必

定須說此我因、若無因

即是無爲、則同外論師

說、亦無別用、若汝執

由假名有故有、此說最

勝、我等亦說如此、

我等立我有、不由

實有說有、亦不下由假

名有說有、此何爲、約

然犢子部執下有補特伽

羅其體與蘊不一不

異、此應思擇爲實爲

假、實有假有相別云何、

別有事物是實有相如

色聲等、但有聚集是假

有相如乳酪等、計實計

假各有何失、體若是實

應與蘊異、有別性故

如別別蘊、又有實體

必應有因、或應是無

爲便同外道見、又應

無用徒執實有、體若是

假便同我說、

爾れば彼諸犢子(部) (gNas-Mahī-Bu; vātsi

putrīyāh) 補特伽羅 (Gai-Zag) 有り、謂ふ如

き此は且く簡擇せらるべし。彼等は云何にし

て實體なりと謂ふや、或は假設なりと謂ひ、

實體なりと謂はる、此は又何ぞや、假設して

と言はる、此は又何ぞや。若し色 (śvags) 等

の如く別の有體 (dṛśyā-pō) 有りと言は、實

體として存在せるなり。若し乳等の如く一般

なりと言は、假設して存在せるなり。それ

よりして云何に成るや、且く若し實體として

有ればそは自性差異せるが故に諸蘊より別な

りと言はるべし、彼此の蘊の如し。又此因を

説くこと必要なり。若し無爲 (bDus-Ma-Bu

に積聚せられざりしもの) ならば、其故に外

道の見たるべく又必要無きものたるべし。若

し假設にして有りと言は、吾等も亦其語をか

く説く。

そは實體としてのみ有るにあらず又假設に

して存在するにあらず。爾らば何の謂ぞ、

現在の内の執する諸蘊を因 (Rgyu) とせられ

内所取現世諸陰、執說爲我、

今此別言於義復不開顯、非我等所解、此約言顯何義、若義如此、謂緣諸陰、於諸陰中一假名說我、此義應成、譬如緣色等物一假名說乳、復次若義如此、謂因諸陰故、我言成諸陰、是說我言因故、此執亦同前失、

我等說我不如此、若不爾云何、如約薪執說火、約陰執說人亦爾、云何約薪執說火、若離薪火不可執說、不可立火與薪有異、與薪無異、若火異薪、薪應不熱、若火不異

立補特伽羅、

如是謬言於義未顯我猶不了、如何名依、若攬諸蘊是此依義、既攬諸蘊成補特伽羅、則補特伽羅應成假有、如下乳酪等攬色等成、若因諸蘊是此依義、既因諸蘊立補特伽羅、則補特伽羅亦同此失、

不如是立、所立云何、此如世間依薪立火、如何立火可說依薪、謂非離薪可立有火、而薪與火非異非一、若火異薪、薪應不熱、若火與薪一所燒即能燒、如是不離蘊立

て補特伽羅 (Gan-Zag; 人) を施設するなり。

此「旨の如き言葉、意義顯明ならざる」を（余）は解了せず。「因とせられて」と言はるゝ此は何ぞ、若し此義は「諸蘊を緣する處に」と言はるゝ此なりと言はるゝ、それらのみに於て補特伽羅は全く假立せられたり例へば色等を緣じてそれらのみに於て乳を施設する如し。若し此義は「諸蘊に依りて」と言はるゝ此なりと言はるゝ、諸蘊は補特伽羅を施設する因なるが故に其同じき過失たるべし。

そは其如く施設せず爾らば如何に謂ふ、例へば薪 (Bar-je) を因とせられて火を施設するが如し。奈何にして薪を因とせられて火を施設すると言ふや。薪無くして火は施設すべからずと雖も而も薪より火別なりと決定する能はず、又別にあらずと決定することも能はず。若し別ならば薪は熱性にあらざるべし。又別ならずば燒かるゝもの即燒くものたるべし。

薪、所燒應_二即是能燒_一、如
此離_二諸陰_一、不可_レ執_二說
人_一、亦不可_レ說_二人異_一諸
陰、由_レ有_二常過失_一故、亦
不可_レ說_二人與_一諸陰_一不
異、由_レ有_二斷過失_一故、

善友願汝爲_レ我說、何物
爲_レ薪、何物爲_レ火、後我
當_レ得_レ知_二約_一薪執_二說火_一
義、此中何所_レ應_レ說、所
燒是薪、能燒是火、若有
應_レ說_二必如此說_一、此中
汝須_二更決說_一、何物是所
燒、何物是能燒、於_二世間
中_一、可然物說名_二薪_一、亦名
所燒、若然能燒光最熱
說名_二火_一、何以故、此物能
然_二彼能燒_一彼、由_二能變_一
異彼相續_二後不_一如_二本故_一、
此_二各有_一八物所成、緣

補特伽羅、然補特伽羅
與_二蘊非_一異_一、若與_二蘊異
體應_二是無常_一、若與_二蘊一
體應_二成斷_一、

仁今於此且應_二定說_一、

何者爲_レ火何者爲_レ薪令
我_レ了_二知火依_一薪義_一、何所_レ
應_レ說、若說應_レ言_二所燒
是薪能燒是火_一、此復應_レ
說何者所燒何者能燒
名_二薪名_一火、且世共_レ了、
諸不_二炎熾_一所燃之物名_二
所燒薪_一、諸有_二分明_一極
熱炎熾能然之物名_二能
燒火_一、此能燒_二燃彼物_一
相續、令_二其後後異_一前
前_レ故、此彼雖_二俱八事爲_一
體、而緣_二薪故火方得_一
生、如_二緣乳酒生_一於酪

かくの如く諸蘊無くしては更に補特伽羅は施
設すべからず、諸蘊より別なりと決定するこ
とも尙能はず、常 (Rttag-Pa) たるべきなり
別ならずとも又決定し得ず、斷 (Chad-Pa) な
るべきなり。

爾らば且く薪とは何、火とは何なるかを説
け。それによりて「云何にして薪を因とせら
れて火を施設するか」は知らるべきなり。此
處に何が言はるべきか。燒かるゝものは薪な
り、能く燒くものは火なりと云ふと雖も、こ
ゝに燒かるゝとは何、能く燒くとは何なるか
それこそ説かるべきなり。且く世間に於て木
等の燃焼せざる處に薪と名けられ、又所燒
(Sceg-Bya: 燒かるゝもの) と言はるゝなり。
又燃焼する所に火と名けられ、亦能燒 (Sceg-
Pa: Byed Pa: 燒や作すもの) と名けられる。
燃焼し且つ極熱する所のものによりて、彼を
能く燃し燒きて相續を成するが故なり。今二
は又八事 (Rdsas-hRegyad) なり。薪に依りて

薪火得_レ生、譬如_下緣乳酪生、緣_二摩偷_一酢_レ生、是故言_二約薪說_一火、若爾則知火與薪異、由_レ不同時故、若人如火必定緣陰生異_二於陰_一、則成_二無常_一、復次若於_二然薪中_一、是熱觸說名_二火_一、所餘三大與_二此共生_一、許_二此名薪_一、此_二互有_一差別、明了易知、由_二相有_一異故

約薪有_二火義_一、汝今應說、云何約薪執_二說火_一、何以故、由_下薪非_上是火因、亦非_中執_二說火_一因_上、何以故、但火是執_二說火_一因、若汝說_二約言_一、是依止義、或共有義、若爾諸陰

酢_上、故世共說_二依薪有_一火、若依_二此理_一、火則異薪、後火前薪時各別故、若汝所計補特伽羅如_二火依薪依_一諸蘊者、則定應說_下緣蘊而生體異_上諸蘊_一、成_中無常性_上、若謂_下即於_上炎熾木等_一、煖觸名_二火餘事名_一薪、是則火薪俱時而起應_二成_一異體、相有_二異故_一、

應說_二依義_一、此既俱生、如何可_レ言_二依薪立_一火、謂非_二此火用_一薪爲因、各從_二自因_一俱時生故、亦非_二此火名因_一薪立_上、以下_二立_一火名_上、因_中煖觸_上故、若謂_二所說火依薪言爲_一顯_二

火生ず、そは又例へば乳に依りて酪生じ、甘きもの (mNaī-Bo) に依りて酢 (Tshūhū; 譯者云、Tshūhū; とは支那の酢の音譯なり) 生ずる如し。其如くなれば「薪を因とせられ」と言はるゝ時、其處にそは (火は) それ (薪) と時別異なるが故に又別 (異) なり。若し是の如く諸蘊によりて補特伽羅生するならば又それらより別 (異) なるものにして、不常 (Mī-Rag-Ḍa) たるべし。若し木等の燃燒そのものに熱する狀態有る所のものが火にして、それと俱に生ぜし所の三大 (hByun-Ba-sSum) は薪なりと言へば、其二 (火と薪) も相は又別 (異) なる故に異性なりと成就せらる。云何にして彼薪を因とせられて火を施設するや、因とせられたる意義をも亦、説かんとを要す。其 (薪) は又其 (火) の因にあらず、其 (火) を施設する因にも亦あらず。火こそ其 (火) を施設する因なり。若しも因とせられたる義は、依の義又は俱時に起る義なりと言は、諸蘊も亦其と同じく補特伽羅の所依たり

於人應成_二依止_一、應成_二共生_一、彼互差別、亦明了易_レ知、復次若陰滅人應_二即滅_一、譬如薪滅火即滅_一、

是汝所說、若火異薪、薪應_レ不熱、此中何物名熱、若汝說_二熱性_一名熱、薪應_レ不熱、別火性故、復次若汝說_二若有_二熱性_一名熱、此物雖_下與_二熱性_一火_上異、此復成_レ熱、與_二熱性_一相應故、是故於_二別異_一無_二過失_一、復次若汝言、正然物說名薪、亦說名火、是故約義、汝今應_レ說、若是陰即是人、此不_二異義_一、即至_レ不_レ可_レ遮、是故

俱生或依止義、是則應_レ許補特伽羅與_二蘊俱生_一或依_二止蘊_一、已分明許_二體與_レ蘊異_一、理則應_レ許_二若諸蘊無補特伽羅體亦非_一有、如_二薪非_レ有火體亦無_一、而不_レ許_レ然、故釋非_レ理、

然彼於_レ此自設_二難言_一、若火異薪薪不_レ熱、彼應_レ定說_二熱體謂_レ何_一、若彼釋言_二熱謂_レ煖觸_一、則薪非_レ熱、體相異故、若復釋言_二熱謂_レ煖合_一、則應_二異體亦得_二熱名_一、以_二實火名_一因_二煖觸_一、餘與_二煖合_一皆得_二熱名_一、是則分明許_二薪名_一熱、雖薪火異_二而過不_レ成、如何此中舉以爲_二難_一、若謂_二木等偏炎熾時_一說名爲_二薪亦名爲_レ火_一、是則應_レ

或は俱時に起るなるべく、乃ち異性として明かに決定するなり。其_二蘊無_{くば}補特伽羅も亦無かるべし、薪無_{くば}火無きが如し。

凡そ「又薪より火別ならば薪は熱性にあらざるべし」と説かれたる處に、「熱する」と名けらるゝ」此は何ぞ。且く若し「熱性なり」と言はゞ薪は熱のみにあらざるべし、別の大言は_二熱性を具するなり_一と言へば、熱性を自性し_二熱性を具するなり_一と言へば、熱性を自性せざる火より別なるものも亦熱するなりと成就せらる、熱性を具するが故なり。是故に義差別なるが故に過失はなきなり。若し木等の燃焼するその一切のものを薪なり又は火なりと言はゞ、それによりて因とせられたる義も又説かるべし、諸蘊こそ補特伽羅にして、別にあらざる(の觀念)は遮除すべからず。かる

此譬不成、如前云「約薪執說火、約陰執說人亦爾、

復次若不可說人與陰異、所知有五種、謂過去未來現在無爲不可言、此應不可說、何以故、此所知於過去等、不可說爲第五及非第五故、

是時汝等執說人、爲觀諸陰執說人、爲觀人執說人、若觀諸陰執說人名、但約陰中執說人名、由人不可得故、若觀人執說人、云何言約陰執說人、何

說、依義謂何、補特伽羅與色等蘊定應是一、無理能遮、故彼所言如依薪立火、如是依蘊立補特伽羅、進退推徵理不成立、

又彼若計補特伽羅與蘊一異俱不可說、則彼所許三世無爲及不可說五種爾焰亦應不可說、以補特伽羅不可說爲第五及非第五故、

又彼施設補特伽羅應更確陳、爲何所託、若言託蘊假義已成、以下施設補特伽羅不託補特伽羅故、若言此施設託補特伽羅、如何上言依諸蘊立、理則應說依補

が故に、薪を因とせられて火を施設する如くその如く諸蘊を因とせられて補特伽羅を施設すと謂はるゝ此は成就せられざるなり。

若し又此(補特伽羅)は諸蘊より別なりと説かるゝにあらずんば、「知らるゝものは五種にして、過去と未來と現在生と無爲と不可説となり」とかく説くべからざるべし。そは(補特伽羅は)又過去等より第五にあらず、又第五にあらざるにもあらずと説かるべし。

何れの時にても補特伽羅を施設するとき、且く諸蘊を縁じて施設するや、或は又補特伽羅を縁じて施設するや。且く若し諸蘊ならば唯其等(諸蘊)に於て補特伽羅を施設すべし。補特伽羅を縁ぜざるが故なり。又補特伽羅ならば、此は如何ぞ諸蘊を因とせられて施設するなるか。補特伽羅のみその因なるが故なり

以故、此執_二說_一但人是所緣境_二故、若汝言諸陰若有人則可_レ知、是故言約_レ陰執_二說_一有人、若爾眼根思惟光明等、若有_レ是時此色方可_レ知、亦應_下約_二眼根等_一執_中說_上色_一、

是有_二此義_一、汝應_レ說、人於_二六識_一中、是何識所_レ知、彼說_下由_二六識_一所_レ知、此義云何、若緣_二眼所_一知色_一分別觀_レ人、應_レ說此人_一是眼所知、不可_レ說_二即色非即色_一、乃至若緣_二意所_一知法_一分別觀_レ人、應_レ說此人_一是意所知、不可_レ說_二即法非即法_一、

特伽羅、既不_レ許然、故唯託_レ蘊、若謂_下有_二蘊此則可_レ知_一故、我上言_二此依蘊立_一、是則諸色有_二眼等緣_一方可_レ了知_一故、應言_レ依_二眼等_一、

又且應_レ說補特伽羅是六識中何識所識、六識所識、所以云何、若於_二一時眼識識_一色因茲知有_二補特伽羅_一、說此名爲_二眼識所識_一、而不_レ可_レ說_二與色一異_一、乃至一時意識識_二法_一、因茲知有_二補特伽羅_一、說此名爲_二意識所識_一、而不_レ可_レ說_二與法一異_一、

若し諸蘊有らば補特伽羅を緣す、それ故に諸蘊を因とせられて此(補特伽羅)を施設すと云ふならば、爾らば色も亦眼と作意 (Yid-Ia-Byed-Pa) と明 (sNan-Ba) 等有る時緣すべきが故に、其等を因とせられて施設せられたるなりと言はざるべからず。

此は更に又言はるべし、諸六識 (Rnam-Par-Oes-Pa Drug) の中に於て補特伽羅は何れの識によりて識らるべきか。六の部分によりて又知らるゝなりと謂はるべし。「云何に作されたるによりて」と言ふや。「若し眼によりて識らるゝ諸色に依りて補特伽羅を緣すなり」と言は、補特伽羅は眼によりて識らるゝなりと言はるべし、而も諸色なりと言はれず、諸色にあらざるなりとも亦言はれざるなり。その如く「意によりて識らるゝ諸法に至るまで」に依りて補特伽羅を緣す、と言は、補特伽羅は意によりて識らるゝなりと言はるべし、而も又諸法なりとは言はれず、諸法にあらずと

若爾此人應_レ成_下與_二乳等_一同_上、若緣_二眼所_レ知色_一分別觀_レ乳、或觀_二水等_一、應說_二乳水是眼所知_一、不可_レ說_二即色非即色_一、如此應說、鼻舌身所知亦爾、乃至不可_レ說_二即觸非即觸_一、勿_二乳水等非_二四物所成_一、此非_二所許義_一、是故如_二色等具_レ物假說名_二乳及水等_一、如此亦應_下具_二諸陰_一假說名_レ人、此義應成、

是汝所說、緣_二眼所_レ知色_一分別觀_レ人、此言有_二何義_一、爲_下色是觀_二察人_一智因、爲_下正證_二知色_一即證_中

若爾所計補特伽羅應_下同_二乳等_一唯假施設、謂如_下眼識識諸色_一時、因此若能知_二有_二乳等_一、便說_二乳等眼識所識_一、而不可_レ說_二與_二色_一一異_一、乃至身識識_二諸觸_一時、因此若能知_二有_二乳等_一、便說_二乳等身識所識_一、而不可_レ說_二與_二觸_一一異_一、勿_二乳等成_二四或非_一四所成_一、由此應成_下總依_二諸蘊_一假施設有_中補特伽羅_一、猶如_下世間總依_二色等_一、施_二設乳等_一、是假非_レ實、

又彼所說、若於_二一時_一眼識識色、因茲知_レ有_二補特伽羅_一、此言何義、爲_下說_二諸色是_二補特伽羅_一

も猶言はれざるなり。

その如くならば爾らば乳等と同じかるべし。若し眼によりて識らるゝ諸色に依りて乳若くは水を縁するならば乳若くは水は眼によりて識らるゝなりと言はるべし、而も諸色なりと説かれず、又諸色にあらずとも説かれざるなり。若しその如く鼻と舌と身によりて識らるゝなりと説かるべし、而も又諸の「觸知せらるゝもの」と言はれず、諸の「觸知せらるゝにあらず」とも亦説かれざるべし、乳と水との二が四物たるの結果に來るが故なり。此故に總じて色等に於てのみ乳或は水を施設する如く、諸蘊に於て補特伽羅を施設すと言はるゝなりと成就せられたり。

又「眼によりて識らるゝ諸色に依りて補特伽羅を縁すなり」と説かれたる所の此語義は何ぞや。且く諸色は補特伽羅を縁するの因なるや或は諸色を縁する時補特伽羅を縁すと言

知人、若色是人智因、亦不可說人異於彼、若爾色與光明眼根覺願等、亦應不可說異、彼是色智因故、若正證知色、即證知人、爲下即由色證智證知人、爲由別智、若即由色證智證知人、人與色不應成異性、或於色但假說人、若不爾、若由智所證知、此人非色此色非人、此二云何分別、若不能如此分別、云何強立此言、謂色是有、人是有、何以故、由隨證知可說彼有如色、乃至於法亦應說如此、若由別智分別此二、別時所得故、人應成

因、爲了色時補特伽羅亦可了、若說諸色是了此因、然不可言此異色者、是則諸色以眼及明作意等緣爲了因故、應不可說色異眼等、若了色時此亦可了、爲色能了即了此耶、爲了於此中別有能了、若色能了即能了此、則應許此體即是色、或唯於色假立於此、或不應有如是分別如是類是色、如是類是此、若無如是二種分別、如何立有、色有補特伽羅、有性必由分別立故、若於此中別有能了、了時別故、此應異色、如黃異青前異後等、乃至於法

はるゝなるや。若し「諸色は補特伽羅を緣するの因にして、此（補特伽羅）は此等（諸色）より別なりと言はれざるべし」と言へば、爾らば色も亦明と眼と作意等より別なりと言はれざるべし、それらはそれを緣する因なるが故なり。若し諸色を緣する時補特伽羅を緣すと言は、正しく其を緣するのみによりて緣するや、尙又別によりてなりや。若しそれのみによりてなりと言へば、補特伽羅は色より自性差異せざるならんか或は色のみに於てそれを施設するならんに、「此は色なり、此は補特伽羅なり」と言はるゝ此は又如何にして斷定（分別）するや。若しその如く分別せざるならば、「色も有り、補特伽羅も亦有り」と言はるゝ此を又云何にして立言するや。緣するに由りて其は有りと立言し盡さる。その如く法に至るまでに於ても亦言はざるべからず。若し「別によりてなり」と言は、差異せる時に緣するが故に、色より別なるべし、青より（異なる）黄の如く、又剎那 (Skad-Cig-Ma) より

異色、譬如黃色異青等、又如前後刹那、乃至於法亦應說如此、若汝言、如色及人一異不可說能證知、此二智一異亦不可說、是故此智亦不可說是有爲、則破自悉檀、

若說人是有、但不可說卽色非卽色、云何佛世尊說、色無我乃至識亦無我、是汝所說、眼識能證見人、此識爲緣色生、爲緣人生、爲緣二生、若爾何有、若緣色生、則不能緣人生、譬如聲等、何以故、若緣此塵此識得生、唯此塵是此識緣、若緣人及二、此執與經不相

徵難亦然、若彼救言如下、此與色不可定說是一是異、二種能了相望亦然、能了不應是有爲攝、若許爾者、便壞自宗。

又若實有補特伽羅、而不可說色非色者、世尊何故作如是言、色乃至識皆無有我、又彼既許補特伽羅眼識所得、如是眼識於色此俱爲緣何起、若緣色起、則不應說眼識能了補特伽羅、此非眼識緣、如聲處等故、謂若有識緣此境起、卽用此境爲所緣緣補特伽

(異)他の刹那の如し。その如く法に至る迄にも亦説かざるべからず。若し色と補特伽羅との如く、それらを縁することも亦、別なると別にあらざるとは説くべからずと言はゞ、爾らばそれによりて有爲なりとも説くべからざるが故に、成就せられたる邊際 (Grub-Pajim Thab) を損害するなり。

若し又此(補特伽羅)有りて、諸色なりと説くべからず、諸色にあらざるなりとも亦説くべからざるならば、然らば何故に世尊によりて、「色は我 (bDag; atman) にあらず」より「識 (rTsan-Par-Ces-Pa) は我にあらず」と言はるゝに至るまで説き給ひしや。眼識それによりて此補特伽羅が縁せらるゝ所の其(眼識)は色に縁りて生ずるや、或は補特伽羅、又は二個(色と補特伽羅)に縁りて生ずるや。若し諸色に縁りて生ぜば聲等の如く、補特伽羅を識る能はず、凡そ境のみに縁りて識生ずる所のその同じきもの(境)は彼(識)の所縁の縁

應一故、則爲佛經所違、何以故、經中已決判此義、唯依緣二法諸識得生、

復有別經、亦達此執、經云比丘眼是因色是緣、能生眼識、何以故、一切所有眼識、唯因眼緣色生、若如汝所執、此人應成無常、何以故、是因是緣能生眼識、彼皆無常、由此經言故、若汝執、人非眼識境、人則非眼識所知、復次若汝立義、人是六識所知、此人由耳識所知故、應成異色、譬如聲由眼識所知故、應成異

羅非眼識緣者、如何可說爲眼識所緣、由此定非眼識所了、若眼識起緣此或俱便違經說、以契經中定判識起由緣故、

又契經說、苾芻當知、眼因色緣能生眼識、諸所有眼識皆緣眼色故、又若爾者、補特伽羅是應無常、契經說故、謂契經說、諸因諸緣能生識者皆無常性、若彼遂謂補特伽羅非識所緣、應非所識、若非所識應非所知、若非所知如何立有、若不立有便壞自宗、又若許爲六識所識、眼識識故、應異聲等、猶如色、耳識識故、

(dMigs-Kyi-Kyen) なり。若し「補特伽羅或は二個に緣りて生ずなり」と言はゞ、此は經に異す。經に據りて、「二に緣りて識は生ず」と決定して理會せられたり。

その如く、「比丘(dGe-Shon)よ、眼識を生ぜしむるに就いて、因は眼なり緣は諸色なり(譯者曰く、旭雅校訂本俱舍論に「眼因色緣」と訓點すれども舊譯及び西藏本によりて「眼、因色、緣」と訓すべきなり)何故ぞなれば、凡そ眼識は云何なるものなるも一切眼と諸色とに緣りて生ず」と説かれたり。その如くなれば補特伽羅は不常たるべし。經に據るに「眼識を生ぜしむるに就いて、凡ゆる因たるもの及び緣たる所のものも亦不常なり」と説き給ひしが故なり。若し其(眼識の所緣は補特伽羅にあらざれば、然ればそれ(補特伽羅)によりて識らるべきものにあらざるべし。若し又全六識によりて識らるべきものなりと認許せ

聲、譬如色、於餘塵應知亦如此、

應異色等、譬如聲、餘識所識爲難准此、

復次此經文句、違汝所執、經云波羅門、是五根各別行處、各別境界、是因自行處境界、彼各各受用、非別根能受用別根行處境界、謂眼根耳根鼻根舌根身根、心能受用五根行處境界、是故心是彼所依止、人非境界、若非境界、不應是六識所知、

若爾意根應成別不通、經云有六種根、各

又立此爲六識所識、便違經說、如契經言、梵志當知、五根行處境界各別、各唯受用自所行處及自境界、非有異根亦能受用異根行處及異境界、五根謂眼耳鼻舌身、意兼受用五根行處及彼境界、彼依意故、或不應執補特伽羅是五根境、如是便非五識所識、有違宗過、

若爾意根境亦應別、如六生喻契經中言、如是

ば、そは耳識によりて識らるべきものなるが故に色より別のものたるべし、聲の如し。眼識によりて識らるべきものなるが故に聲より別のものたるべし、色の如し。是の如く他のものに於ても又適應せらるべきなり。

「波羅門 (Brahm-Ze) 」、此等の五根 (d-Bah-Po-I-tia) は行境 (Spyod-Yu) 差別有るもの又境差別有るものにして、各自の行境と境とを各別に受用 (Tams-Su-Myo-Ba) す。根の別異なるものによりて、別異なる行境と境とを受用することは有るにあらず。かくの如く眼の根と、耳の根と、鼻の根と舌の根と身の根と意の根とは、此等五根の行境と境とを受用す、意の根は此等の所依 (Ren) なり」と説かれたる此經の語とも又相違するに至るべし。或は補特伽羅は境にあらずべし。若し補特伽羅は境にあらずと言はゞ、爾らば識らるべきもの」にあらずべし。

若し爾らば又意根に於て過失たるべし、六生 (Srog-Chags) (經) の如きによりて、「此等

別行處各別境界、樂欲自行行處境界、此言於六衆生、我譬中說、是義不然、於此經中不定說六根爲根、是五根樂欲見等事、不有故、彼識亦爾、彼增上處所引意識、立此爲根、故說名根、是獨類心增上緣所引意識、此識非能樂欲受用餘根行處境界、是故無失、

復次佛世尊說、比丘我今爲汝等說一切所應知一切所應識法門、眼根是所應知、是所應識、色眼識眼觸、由眼觸因緣、於內生受、謂苦樂不苦不樂等、乃至由意觸因緣、於內生受、謂苦樂

六根行處境界各有差別、各別樂求自所行處及自境界、非此中說眼等六根、眼等五根及所生識、無有勢力樂見等故、但說眼等增上勢力所引意識、名眼等根、獨行意根增上勢力所引意識、不能樂求眼等五根所行境界、故此經義無違前失、

又世尊說、苾芻當知、吾今爲汝具足演說一切所達所知法門、其體是何、謂諸色眼觸、眼觸爲緣內所生受、或樂或苦或不苦不樂、廣說乃至、意觸爲緣內所生受、或樂或苦不苦不樂、是名一切

の六根は行境と境と差別有るものにして各自の行境と境とを樂ふなり」と説かれたり。(此六生喻經に説かれたる)譬喩は、唯(眼等の)根を根なり」とは説かれざりき、(何故に爾るや眼等の)五及びそれらの諸識は見(mThon-ba)等を樂求すること有らざるが故なり、それらの力(dBān)によりて引かれたる意識は根なりと説かれたり。獨意の根によりて引かれたる意識は、何れもそれより別異なるものゝ行境(眼等の境)を樂求せざるもの(にして自の境なる法處のみを緣するもの)なるが故に其故に過失無し。

又世尊によりて「比丘等よ、一切の所達(mNon-Par-Ces-Par-Bya-Ba; 現に知らるべきもの)の所知(Yon-Su-Ces-Par-Bya-Ba; 遍く知らるべきもの)の法門(Rnamo-Grāns)は説明せらるべきなり」と説かれ、[所達と所知とは、眼と諸色と眼識と、眼の和合觸(hDus-Te-Reg-Pa)と、眼の和合觸の緣に由りて内の受(Nan-gi-Thsor-Pa)樂(bDe-Ba)或

不苦不樂等、是名一切所應知一切所應識法門、由此經、若有所應知及所應識、決唯此量不出於此、於中不說人、是故人決定非所應知、智及識境界同故、

所達所知、由此經文決判一切所達所知法、唯有爾所、此中無有補特伽羅、故補特伽羅亦應非所識、以慧與識境必同故、

執我諸人說云、「我等由眼見人、於非我所、見有我故、彼則墮我見處深坑、於經中佛世尊自了義說云、但於五陰說假名人、於人經中說、依眼緣色生眼識、由三和合生觸、共生受想作意等、是四種無色

諸謂眼見補特伽羅、應知眼根見此所有、於見非我謂見我故、彼便墮墜惡見深坑、故佛經中自決此義、謂唯於諸蘊說補特伽羅、如人契經作如是說、眼及色爲緣生於眼識、三和合觸俱起受想思、於中

は苦(SDug-bSñal-Pa)ゝ、樂にもあらざる苦にもあらざる。(bDe-Ba Yan Ma-Yin Dan Sdug-bSñal-Ba Yan-Ma-Yin-Ba)の生ずるものと言はるゝものより、意の和合觸の緣によりて内の受と言はるゝに至るまでなり」と廣く說かれて、「此は一切の所達と所知との法門なり」と說かれたり。その故に所達と所知とは是程なりと決定して理會せられたるも、補特伽羅は(所知と所達と)にあらず、爾れば此(補特伽羅)は所識(識らるべきもの)にもあらず、慧と識との二は境同じきが故なり。

諸の補特伽羅(を執する諸人)「眼によりて補特伽羅を見る」と見る時は、我無き(bDag-Med-Pa)によりて我(bDag)を見ると言はるゝものにして、我見の處(bDag-Tu-Lta-Ba 'byo-Nas)になれるものなり。世尊によりても亦經中に、「諸蘊のみに於て補特伽羅と言はるべきなり」と此を決定し給へり。人が破碎せられたる經(mi-Pham-Pa'u mDo)の中にも亦、「眼と諸色」とに緣りて眼識生ず。三聚合

陰、及眼根并色、唯如此量說名人、於此中立諸名、謂薩埵那羅摩菟闍摩那婆弗伽羅時婆布灑善斗、於中立言、我由眼見色、於中有世傳云、此命者如此名、如此姓、如此種類、如此食、如此受苦樂、如此長壽、如此久住、如此壽際、比丘如此事、唯名為量、唯言為量、唯傳為量、如此等一切法無常有為、故意所造、由因緣生、如此了義經、於此執中、佛世尊說為依為量、此經不可更別思量、

後四是無色蘊、初眼及色名為色蘊、唯由比量說名為人、即於此中隨義差別、假立名想、或謂有情不悅意生儒童養者命者生者補特伽羅、亦自稱言「我眼見色、復隨世俗說、此具壽有如是名如是種族如是姓類如是飲食如是受樂如是受苦如是長壽如是久住如是壽際、苾芻當知、此唯名想、此唯自稱、但隨世俗假設有、如是一切無常有為、從衆緣生思所造、世尊恒敕依了義經、此經了義、不應異釋、

(gSum-hDuṣ-Pa) によりては觸 (Reg-Pa) なり。俱時に生ぜられたるものは受 (Tor-Ba) と想 (hDu-Ges) と心 (Sems) とにして、(旭雅校訂本に「三和合、觸、俱起受想思」と訓點すれども西藏本による時は「三和合、觸より、俱起、受想思」と訓點すべきか) その如く色を有せざる(無色の)その四と、色を有する(有色)と眼の根と、その量に於て人たるの状態(Mi-mid)と言はるべし。此中にて有情(sens-can; satva)と、男子(藏文にはMin名とある)も舊譯に那維 || nara とあるより見ればMiの誤なるべし)と、意生 (Shed-las-Skyes; Manuja)と、儒童 (Shed-Bu; mānava)と、養者 (gSo-Ba; Poṣa)と補特伽羅 (Gaṇ-Zag; Puḍgala)と、命者 (Srog; Jiva)と、生者 (Skyes-Bo; jantuh.善斗)と言はるゝ此は名なり。此の中に我の眼によりて諸色を見ると言はるゝ此は立宗 (Khas-hChe-Ba; Pratiñā)なり。此中にて此くの如くその具壽 (Thse-Dan-Ltan-Pa) の名は此なりと言はれ、種族 (Rigs) は此

なりと謂はれ、種姓は(Rus)此なりと言はれ食物(Zas)は此の如きものを食す、樂と苦は此くの如きものを味ふ、壽(Thse)は是程のものを得し、長(Ym)さは有る限り住す、壽際(Thsehi-Mthah)は此程なりと言はるゝ此は言説なり。比丘等よ、此の如く此等は唯名此等は唯立宗、此等は唯言説なり。一切法は不常、有爲にして思より放出され、緣起(Then-Cin-luBer-Bar-luByun-Ba)するものなり」と説かれたり。又世尊によりて「眞實の義の經を依とせる」を説き給へり、爾れば此は屢々思量せらるべきなり。

その如く「波羅門よ、一切有なりと言はるゝは、此の如く十二處(Skye-mChed-bCu-gZis)に盡されたり」とも説かれたり。若し此補特伽羅は十二處にあらざれば、そは有にあらざると言はるゝなりと成就(證明)せられたり。若し處なりと言はゞ、爾らば(補特伽羅は)「説かるべきにあらざるもの」にあらざるなり。

彼等の(誦する)如き(經)に於ても、又此語

復次有別經說、婆羅門若說一切有、唯是十二入、若人非入所攝、此人必定不有、此義則成、若人入攝、非不可言、

又薄伽梵告梵志言、我說一切有唯是十二處、若數取趣非是處攝、無體理成、若是處攝、則不應言是不可說

於彼部中「有」如此

彼部所誦契經亦言、諸

經、經言比丘、若所有眼、若所有色、廣說如經、由唯此量、比丘諸佛如來、說一切有、窮顯一切說、

又頻毘娑羅經中說、比丘嬰兒無聞凡夫、隨逐假名我言、此中無我無我所、唯苦欲生得生、廣說如經、

有阿羅漢比丘尼、名世維、對魔王說此偈言

所有眼、諸所有色、廣說乃至、苾芻當知、如來齊此施設一切、建立一切有自體上法、此中無有補特伽羅、如何可說此有實體、

頻毘娑羅契經亦說、諸有愚昧無聞異生、隨逐假名計爲我者、此中無有我我所性、唯有我一切衆苦法體、將正已生、乃至廣說、

有阿羅漢苾芻尼、名世維、爲魔王說

汝墮惡見趣
於空行聚中
妄執有有情
智者達非有
如下即攬衆分
假想立爲車上

に於て「比丘よ、所有の眼と所有の色」と言はるゝこと廣く說かれつゝ、「比丘よ、此量は如來によりて一切を施設し給ふなり、一切は施設せられたり」と說かれたりと言へり。

頻毘娑羅 (Zugs-can-Sñin-Pohi-vimbisara) の經中にも亦「比丘等よ、我と我所と言はるゝは聞を具せざる童蒙異生によりて、假設せられたる(言說)に墮在せるなり、此處に我又是我所無くして、此苦生する時、(既に)生じ畢れり」と言はるゝこと廣く說かれたり。

又阿羅漢尼世維 (原文 dGra-bCom-Ba dRug || 六阿羅漢とあれども漢譯に對するに意味を作さず、稱友と富樓那波爾陀那等此處の文に關する釋無し、寂靜天の俱舍註釋緊要經較義 (Tan. B. 70. 128) に (dGra-bCom-Ma Brag (Gila) 又 dGe-Sloṭ-Ma Brag) 云ふ) によりて魔に(語り)始められて

有情と言はるゝ者について云何に考ふや

如從和合分
於中說車名上

如_二此依_三諸陰_一
假_レ名說_二衆生_一

世俗立_三有情_一
應_レ知攬_三諸蘊_一

於_二少分阿含中_一、爲_二波
遮利婆羅門_一、說_二此偈_一
言、

波遮利汝聽
能解_二諸結法_一
由_二此心_一有_レ染
復由_二此心_一淨
我者無我體
顛倒故分別
無_二我無_三衆生_一
唯法謂_二因果_一
有分唯十二

世尊於_二雜阿笈摩中_一、
爲_二婆羅門婆柁梨_一說

婆柁梨諦聽_下
能解_二諸結_一法_上
謂依_レ心故染
亦依_レ心故淨
我實無我性
顛倒故執_レ有
無_二有情_一無_レ我
唯有_二有因法_一
謂十二有支

汝は(惡)見になれるものなり
此行 (bDu-Byed) と蘊は空なり
此處に有情あるにあらず
例へば諸支聚に於て
車の名を説く如く
其如く諸蘊に緣りて
俗諦 (Kun-Rdzob) (に於て) 有情と言は
るべし

と言へり。小阿含集 (Lun-Phran-Thsogs) 中
にも亦、波羅門杜松子 (Rgya-Gng-Gi-Bu;
badari 婆柁梨) に屬して、

云何にして心は全て煩惱し
云何にして心は全く清めらるゝや
一切の結を壞するの法を
汝杜松子よ、聞け
我性 (bDag-Nid) によりては無我 (bDag-
Med-Pa) なり
顛倒によりて分別す
此處には我若くは有情も無し
此等の法は因を具するものにして

唯有陰入界

熟思尋此法

人實不可得

如觀內是空

觀外亦如是

此二不可得

能修及空義

所攝蘊處界

審思此一切

無補特伽羅

既觀內是空

觀外空亦爾

能修空觀者

亦都不可得

復有經說、我執中有五種過失、謂起我見衆生見、墮於見處、與外道不異、僻行邪道、心不入空義、不生淨信心、於中不住、於此人聖法不得清淨

經說執我有五種失、謂起我見及有情見、墮惡見趣、同諸外道越路而行、於空性中心不悟入、不能淨信、不能安住、不得解脫、聖法於彼不能清淨

彼不下以此文爲依量、何以故、此文於我部

此皆非量、所以者何、於我部中曾不誦故、汝

十二の有支 (Srid-Pali-Yam-I-ag) を

諸の蘊と處と界となり

審かに思惟せば此の全てに於て

補特伽羅縁せらるゝにあらず

内の空なるを觀せよ

外處の空なるを觀せよ

空性を修する所のものも

又決して縁すべからず

と説かれたり。

その如く我を縁する處には五の過失 (Tasā dMigs; ādinava) 有り、我を見、有情を見、壽命を見るべし(1)、諸外道と差別無かるべし(2)、邪道に墮すべし(3)、此の(人)には心空性 (Stoṭi-Paṭi) に入らず、能く清淨ならざるべく又如實に住せざるが故に解脫せざるべし(4)此の(人)には諸聖法清淨ならざるべし(5)、と説かれたり。(此五の區分の方法は稱友釋論に依る)

彼等は此宗を量となさず、何故ぞと言ふに、是我等が部に誦せざる處なりと言へり。彼等

中、非_レ所_レ誦說、爲_二以_一部爲_二依量_一、爲_下以_二佛言_一爲_中依量_上、若取_レ部爲_二依量_一、佛世尊於_レ彼則非_二正教師_一、彼便非_二釋迦種子_一、若取_二佛言_一爲_二依量_一、如此等文句、云如不_レ取爲_二依量_一、彼云如_レ此等文句、非_二是佛言_一、云何非_二佛言_一、於_二我部中_一非_二昔所_レ誦故、於_レ今非_レ理事起、此中有_二何非理_一、此文句是一切餘部所_レ讀誦、此文句不_レ違_二佛經及法爾_一、「由_二我等不_二讀誦_一故此非_二佛言_一」、「此言一向非_二正思量_一、但由_二強作_一、

於_レ彼爲_レ無_二此經_一耶、謂一切法無_レ我、若汝言、

宗許_二是量_一爲_レ部爲_二佛言_一、若部是量、佛非_二汝師_一、汝非_二釋子_一、若佛言者、此皆佛言、如何非_レ量、彼謂此說皆非_二眞佛言_一、所以者何、我部不_レ誦故、此極非_レ理、非_レ理者何、如是經文諸部皆誦不_レ違_二法性及餘契經_一、而敢於_レ中輒興_二非撥_一、我不_レ誦故非_二眞佛言_一、唯縱凶狂、故極非_レ理、

又於_二彼部_一豈無_二此經_一、謂一切法皆非_二我

には部のみ量なるや、或は又佛の教敎が量なるや。若し部のみ量ならば、爾らば彼等の師(Sotth-Pa とあれども、漢譯に對檢するに Sotth-Pa の誤なるべし)は佛にあらず、又釋子にもあらずるべし。若し佛の教敎が量なりと云はゞ、此宗(ge Shun)は何故に量にあらずるや。(彼等は)「此は佛の教敎に非なるなり、何故ぞや、吾等の部願はざるが故なり」と言ふと稱せらる。此(彼等の言ふ處)は非理に墮す此處に非理とは何ぞや。凡そその宗にして一切の餘部より出で、經と法性とも尙違逆せざる所のものを我等誦せざるが故に佛の教敎にあらずと言ふ、その如き言は殆ど執拗にのみ終れるなり。

且又彼等には「一切法は無我なり」と言はるゝ此經無きか、「補特伽羅は法なりとも言ふべ

不_レ說_二人是法_一、不_レ說_二人異_レ法、若爾此人應成_二非_レ意識所知_一、緣_二二識得_レ生、因_二經文_一決故、

性、若彼意謂補特伽羅與_二所依法_一不_レ一不_レ異故說_二一切法皆非_レ我、既爾應_レ非_レ意識所知_一、二緣生_レ識、經決判故、

於_二此文_一中_二汝云何分別_レ救難、經言於_二無我_一我執、是想倒心倒見倒、於_二無我_一我執是顛倒非_二於我_一、何者非我、諸陰入界、汝於_二前云_一、不_レ可_レ說_二我是色非色_一、此言最不可_レ忍、

又於_二餘經_一如何會釋、謂契經說、非我計_二我此中_一具有_二想心見倒_一、計_二我成_レ倒、說_二於非我_一、不_レ言_二於我_一、何煩會釋、非我者何、謂蘊處界、便違_二前說_一、補特伽羅與_二色等蘊_一不_レ一不_レ異、

何以故、於_二餘經_一說、比丘若有_二沙門婆羅門_一、觀_二執有_レ我、彼一切但依_二五取陰_一起、此觀執、是

又餘經說、苾芻當知、一切沙門婆羅門等、諸有_レ執我等隨觀見、一切唯於_二五取蘊_一起、故無_二依_レ我

からず、又法より他なりとも言ふべからず」と言はるゝなりと稱すならば、乍らば意によりて識らるべきなりと成就せられず、二（眼と諸色乃至意と諸法〓稱友釋論）に緣りて識生ずと確かに說かれたるが故なり。

又「無我を我なりと思度する處には、想顛倒し心顛倒し見顛倒せり」と言はるゝ此を正しく云何に分別するや。無我に於て我なりと思度するは顛倒なりと雖も、我に於ては（顛倒に）あらず。無我とは又何ぞや、蘊と處と界となり。且く前に「諸色なりとも説くべからず、諸色にあらずとも亦説くべからず」と言はれたる所のもの擧げられたり（然るに今は蘊處界は我にあらずとて我は諸色より別なるが故に、前に言はれたるものは棄てらるべし〓稱友釋論取意）。

他經の中にて、「比丘等よ、凡そ沙門或は波羅門我なりと思度して隨見する所のそれら一切は唯此五取蘊（*Pañcābarāṇa-dhātavaḥ*）に於てなりと說かれたり。かる

故一切不_二於_二我起_二我執_二復有_二經說_二若有_二諸人_二能憶_二種種宿住_二已憶正憶當憶_二彼一切唯依_二五陰_二、

若爾此經云何說_二此言_二我如此色等_二於_二宿世_二已生_二此言爲_レ顯_レ能憶_二宿住_二人能憶_中多種宿住_一、若見_二人有_二色_二應墮_二身見過失_一、若不_レ說我_二一切色等則無_二屬處_一故_二說_二此言不爲_レ顯_レ我_一、是故人是假名有_二譬如_二聚流等_一、

若爾佛世尊、不應_レ成_二一切智人_一、何以故、無_レ有_二心及心法能知_二一切法_一、刹那刹那生滅故、是故人

起_二於我見_一、但於_二非我法_一、妄分別爲_レ我_二、又餘經言_二、諸有已憶正憶當憶種種宿住_一、一切唯於_二五取蘊_一起_二、故定無_レ有_二補特伽羅_一、

若爾何緣此經復說_二我於_二過去世_一有_中如_二是色等_一、此經爲_レ顯_レ能憶_二宿生_一一相續中有_二種種事_一、若見_二實有_二補特伽羅_一於_二過去生_一能有_中色等_一、如何非_レ墮_二起_二身見_一失_一、或應_二誹撥言_一無_二此經_一、是故此經依_二總假我_一言_二有_二色等_一如_二聚如_一流、

若爾世尊應_レ非_二一切智_一、無_二心心所能知_二一切法_一刹那刹那異生滅故、若許_レ有_二我可能_二遍知_一、補

が故に一切の我執は唯無我に於てなり。その如く、「凡そ爲種の宿住を隨念する時、(已に)隨念せし或は(現に)隨念し或は(當に)隨念すべき所のそれら一切は、唯此等五取蘊に於てなり」と説かれたり。

若し爾らば何故に「我は過去の時に此の如き色を具有せり」と説かれたるか。その如く多種(の宿住)を隨念すと言はるゝなりと教示するなり。(稱友釋論に、「凡そその如く多種を隨念するものが此の如く隨念す云々」とあり舊譯と一致す)若し補特伽羅色を有すと見るならんには、壞聚見(hiig-Ishogs-Ia-Ia-Ba, sakāyadhiṣṭiḥ; 有身見)の失となるが故に此處には説かざること、唯依處(Skyabs)なり。かるが故に補特伽羅は施設せられたる有にして積聚と流との如し。

若しその如くんば爾らば佛は一切智に非るべし、一切を知るべし、心所(Sems-Byun, Ba; 心より出づるもの)たるものは瑣少も亦無し、刹那なるが故なり。補特伽羅によりて

能知、若爾心滅時、由執
 人不滅故、汝則已信
 許人是常住、我等不說
 於一切境、由智一時現
 前、佛世尊是一切智、若
 不爾此云何、是相續稱爲
 佛、有如此勝能、於
 隨所欲知境中、唯由廻
 心生智無倒故、稱一切
 智、此中說偈

由相續有能
 稱火食一切

說遍知亦然
 不由俱悉解

此義云何可知、由說
 過去等世故、如偈曰

是過去諸佛
 是未來諸佛
 是現在世佛
 能除衆生憂

特伽羅則應常住、許心
 滅時此不滅故、如是便
 越汝所許宗、我等不
 言佛於一切能頓遍知
 故名一切智者、但約相
 續有堪能故、謂得佛
 名諸蘊相續、成就如
 殊勝堪能、纔作意時於
 所欲知境、無倒智起、
 故名一切智、非於一
 念能頓遍知、故於此中
 有如是頌

由相續有能
 如火食一切

如是一切智
 非由頓遍知

如何得知約相續說
 知一切法非我遍知
 說佛世尊有三世故、於
 何處說、如有頌言、

は（一切を）知るべし。その如くんば今心壞滅
 する處にも補特伽羅は壞滅せずと認許せられ
 たるが故に此は常性 (Rtag-Pa-nid) なりと認
 許せられたるなり。吾等は「一切に於て智現
 前せられたるが故に佛は一切智なり」とは言
 はず。然らば云何と云ふや、堪能あるが故なり
 佛と言はるゝ相續なるものに於て何處に於て
 も願を廻するのみによりて無顛倒の智生ずる
 所の此堪能有るなり。此に言へり、

相續に由て行ふが故に、例へば

火を以て一切を焼くと稱するが如し

その如く一切智と言はるゝに就いても

俱時に一切を智る故にあらず。

此を云何に了解すべきや。過去等と説かれた
 るが故なり。

凡ゆる過去の圓滿の諸佛と

凡ゆる未來の諸佛と

現在の圓滿の諸佛たるものとは

諸（衆生）の苦惱を除く

若過去諸佛

若未來諸佛

若現在諸佛

皆滅衆生憂

汝宗唯許蘊有三世、

非中數取趣、故定應爾

【說一切有部阿毗達磨俱舍論卷第二十九

阿毗達摩俱舍論卷第三十

尊者世親

造

三藏法師玄奘奉詔譯

破執我品第九之二

若唯五取蘊名補特伽

羅、何故世尊作如是

說、吾今爲汝說下諸重擔

取捨重擔荷重擔者、

何緣於此佛不應說、不

應重擔卽名能荷、所以

云何、曾未見故、不可說

事亦不應說、所以者何、

汝等但許五陰有三世

非許人、若唯五陰名

人、云何說此經、經云

我今爲汝、說重擔取

重擔捨重擔荷重擔

云何此言不可說、重

擔不能自荷負重擔

故、云何不能此事、非

所曾見故、不可言亦

不可言此事、非所曾見

故、復次應立下取重擔

非中陰所攝、爲成此義

故、佛世尊分下別荷負重

擔人、是命者如此名、

如此姓、乃至如此久住、

及壽際、應知是名荷

又汝等は唯諸蘊のみ三世なりと稱して補特伽羅は(三世に)あらず、若し唯諸蘊は補特伽羅なれば何故に「比丘等よ、汝の爲に重擔(Khu)は説かれたり。又重擔を受くると、重擔を棄つると、重擔を荷ふとは説かれたるに由て」と説かれたるや。何故に説くべからざるや。重擔こそ重擔を荷ふことなりとは理にあらず。何故に爾るや、此の如くは見られざるが故なり。「説かるべきにあらざるもの」も亦理にあらず。何故に爾るや、此の如くは見られざるが故なり。又「蘊を取るもの」は蘊によりて攝せられざるなりとの論結となるべし。「重擔を荷ふこと」は、世尊によりて「凡そ彼具壽名は是なりと言はるゝより、長さは有る限り住し、壽の際は此程なりと言はるゝに至るまでのものをこそ知りて、(補特伽羅が

負重擔、勿_下作_二別物意_一、或執爲_二常住_一、或執爲_中不可言_上、諸陰自能滅_二諸陰_一、謂前陰於_二後陰_一、爲_レ顯_下荷_二負重擔_一義_上、故說_二此文_一、

必定有人、何以故、由_二此經_一言、無_二自然生衆生_一、此執是邪見、何人說_二無_二自然生衆生_一、如_二

亦未_レ見故、又取_二重擔_一、應_レ非_二蘊攝_一、重擔自取會、未_レ見故、然經說_二愛名_一取擔者_二既即蘊攝_一、荷者應_レ然、即於_二諸蘊_一立_二數取_一趣、然恐_レ謂_二此補特伽羅_一是不可說常住實有_一、故此經後佛自釋言、但隨_二世俗_一說_二此具壽有_一如_二是名_一、乃至廣說、如_二上所引_一人經文句、爲_レ令_二了_一此補特伽羅可說無常非_二實有性_一、即五取蘊自相逼害得_二重擔名_一、前前刹刹引_二後後_一故名爲_二荷者_一、故非_二實有_一補特伽羅、

實物としての存在なる_二稱友釋論_一常或は補特伽羅と言はるゝは(蘊等より)別(なる物)なりと知らざるべし、唯それの爲なり」と教へられたり、乃ち唯前の諸蘊は後の諸蘊に於て逼害(して苦となるもの_二稱友_一)なるが故に、重擔に於て重擔を荷ふと説くなり。

補特伽羅は有り此の如く「自然生 (Skye-Ba-Pa; Punjavaradhana の釋に此字を釋して Skye-Ba-pi-Ra-pi-Thsur-Can といふ、「生するに spontaneously の形相あるもの」ゝ意なり、

佛世尊分_二別衆生_一、我說亦爾、是故若人撥_下無於_二餘生中_一自然生、五陰相續世間立名_二自然生衆生_一、說_二此人起_二邪見_一、謂無_二自然生衆生_一、由_二有_二諸陰自然生_一故、是汝所說撥_レ人邪見、見何諦所識、此邪見不_レ應_下由_二見諦_一滅、亦不_レ應_下由_二修道_一滅、何以故、人不_レ屬_二四諦攝_一故、

若汝言_下有_二別經_一爲證、顯_二人非陰_一、經言一人於_二世間_一向生、生爲_二利益_一安樂多人、廣說如經、由_二此經言_一故人

所言、我說_レ有故、謂蘊相續、能往_二後世_一不_レ由_二胎卵濕_一、名_二化生有情_一、撥此爲_二無故邪見攝_一、化生諸蘊理實有故、又許_二此邪見_一謗_二補特伽羅_一、汝等應言、是何所斷、見修所斷、理并_レ不然、補特伽羅非謗攝_二故_一、邪見不_レ應_レ修所斷_二故_一、

若謂_地經說_下有_二一補特伽羅_一生_中在世間_上應_下非_レ蘊者、亦不應_レ理、此於_二總中_一假_二說_一一故、如_二世間說_一、一麻一米一聚一

故に今は舊譯の譯語を以て之を表はすこと、せり)の有情無しと云ふは邪見なり」と説かれたり。誰か自然生の有情無しと云ふや。世尊によりて分別せられたる如く(余も)有(yod)なりと言ふなり。かるが故に此は、蘊の相續に於て自然生の有情無しと撥するもの、邪見なり。諸蘊は自然生するが故なり。それを撥することは邪見ならば、何によりて斷せらるべきや。此は眞理(諦)を「見るによりて斷せらるゝもの」(mThon-Pas-Span-Bar-Bya-Ba; 見所斷)なりと相應せられず、「修によりて斷せらるゝもの」(bSgom-Pas-Span-Bar-Bya-Ba; 修所斷)なりとも亦相應せられず。補特伽羅は諸諦の内に屬せざるが故なり。

若し又「世間に於て獨一の補特伽羅生する時生ず」と説かれたるが故に諸蘊にあらずとは非なり。總ての中に於て而も一を施設するが故に、一麻(Tin)と一米汁(bBras-Thug-Bo-Che)と言はるゝ如く、一聚(Phun-Po)と一

非陰、是義不然、由_二於聚中假_三說一_一故、譬如_二說一_一麻一米、或於_二一聚說_三一言_一、如_二說_三一山一屋_一、應_レ說_二人即是有爲_一、由_二汝許_一有_レ生故、

言、或補特伽羅應_レ許_二有爲攝_一、以_レ契經說_二生三世間_一故、

語 (Tshig) と言はるゝが如し。又は補特伽羅は有爲 (bDus-byas) と言はるゝなりと説かるべし、生を具する状態として認許せられたるが故なり。

如_二陰先未_一有後有、人生不爾、不爾云何、生由_レ取_二別陰_一故、譬如_二延若師生_一、毘伽羅論師生、由_レ取_二明處_一故說名_二生_一、又如_二比丘生道人生_一、由_レ取_二相故說名_二生_一、又如_二老者已生病者已生_一、由_レ取_二別位_一故說名_二生_一。是義不爾、由_レ被撥故、於_二經中佛世尊已撥_二此義_一、何經、於_二眞實空經_一、經云、比丘如_二此有業有果報_一、作者不可_レ得、

非_二此言_一生如_二蘊新起_一、依_二何義說_一生在世間、依_二此今時取_二別蘊_一義、如_二世間說_一能祠者生記論者生、取_二明論_一故、又如_二世說_一有_二苾芻生_一有_二外道生_一、取_二儀式_一故、或如_二世說_一有_二老者生_一有_二病者生_一、取_二別位_一故、佛已遮故此救不_レ成、如_二勝義空契經中說_一有_二業有異熟_一作者不可_レ得、謂能捨_二此蘊_一及能續_二餘蘊_一、唯除_二法假_一、故佛已遮、

そは以前に無き諸蘊より起る如きその如き生にはあらず。爾らば云何なる如きものと言ふや、別の蘊を取るが故なり、例へば明 (Rig-pa; 學識) を受取るが故に祠祭者 (mChod-Spyin-Ba-Pa; yājñika; 延若師) 生ぜり、聲論者 (bRdra-Sprad-Ba-Pa; vāyākarāṇah; 毘伽羅論師) 生ぜりと云はれ、相 (Rtags) (を取る) の故に比丘生ぜり、遊行者 (Kun-Tu-Rgyu 遍行者) 生ぜりと言はれ、別の分位 (gNas-Skabs) を取るが故に老年 (Rga-Ba) 生ぜり、病者 (Ta-Ba) 生ぜりと言はるゝなり。非なり。遮斷せられたるが故に世尊によりて勝義空性經 (Don-Dam-Pa-Ston-Ba-Nid-Kyi-mDo) に由る_二「比丘等_一業 (Las) 有

非_二此言_一生如_二蘊新起_一、依_二何義說_一生在世間、依_二此今時取_二別蘊_一義、如_二世間說_一能祠者生記論者生、取_二明論_一故、又如_二世說_一有_二苾芻生_一有_二外道生_一、取_二儀式_一故、或如_二世說_一有_二老者生_一有_二病者生_一、取_二別位_一故、佛已遮故此救不_レ成、如_二勝義空契經中說_一有_二業有異熟_一作者不可_レ得、謂能捨_二此蘊_一及能續_二餘蘊_一、唯除_二法假_一、故佛已遮、

そは以前に無き諸蘊より起る如きその如き生にはあらず。爾らば云何なる如きものと言ふや、別の蘊を取るが故なり、例へば明 (Rig-pa; 學識) を受取るが故に祠祭者 (mChod-Spyin-Ba-Pa; yājñika; 延若師) 生ぜり、聲論者 (bRdra-Sprad-Ba-Pa; vāyākarāṇah; 毘伽羅論師) 生ぜりと云はれ、相 (Rtags) (を取る) の故に比丘生ぜり、遊行者 (Kun-Tu-Rgyu 遍行者) 生ぜりと言はれ、別の分位 (gNas-Skabs) を取るが故に老年 (Rga-Ba) 生ぜり、病者 (Ta-Ba) 生ぜりと言はるゝなり。非なり。遮斷せられたるが故に世尊によりて勝義空性經 (Don-Dam-Pa-Ston-Ba-Nid-Kyi-mDo) に由る_二「比丘等_一業 (Las) 有

實無有故、是能棄捨此陰、往取彼陰、唯除於法世流布語所立人、

又於頗求那經中說、我亦不說衆生能取陰、唯諸法相續起由此經是故知、無有一人能取諸陰、能捨諸陰、

汝今信執何延若師生、乃至病者生、立爲三人譬、若執我此不成就、非有故、若執心及心法、彼刹那刹那、未曾有有故、不可爲譬、若執身亦如心、如身明相陰及人應成差別、老病此二

頗勒具那契經亦說、我終不說有能取者、故定無一補特伽羅能於世間取捨諸蘊、

又汝所引祠者等生、其體是何而能喻此、若執是我彼不極成、若心心所、彼念念滅新新生故、取捨不成、若許是身、亦如心等、又如明等與身有異、蘊亦應異、補特伽羅、老病二身各與

り、異熟(Rnam-Pai-Smin-Pa)有々、法に於て施設せられたるもの (Chos-Su-bRdar-bTags-Pa)即ち縁起の相あるもの、稱友を除き、此諸蘊を棄て、他の諸蘊を結生 (Yin-mTams-SByor-Ba; Pratisandhi)する所の能作者 (Byed-Pa-po)は縁せられざるなり」と説かれたり。

迦勒求那經 (Kāṭhina; dBo-las-Skyes-Kyi-mDo) によりても亦「迦勒求那よ、取るとは言はず」と説かれたり。此故に諸蘊を受くることとは何等も無く、棄つることも亦無きなり。

更に汝祠祭者より老者に至るまでは何れに屬して譬喩を作すや、若し補特伽羅なりと言はばそは成就せられず。若し諸の心と心所なりと言はば、それらは各々の刹那に於て前無き處より生ずるに過ぎざるものなり。若し身 (Tus) なりと言はばそは又それ (心心所) と等しくして、身と明と相との如く蘊と補特伽羅との二は又別異なる體たるべし。老年と病者

是別身、是僧法所立變異義、於前已破、是故延若師等不_レ成_レ譬、若汝執、諸陰有_二未有有義_一、人則不_レ爾、若爾人應_レ異陰、亦是常住、此義分明所顯、汝說_二陰五人_一、云何不_レ說_二人與陰異_一、

汝云何說_二四大色_一、色不_レ異_二四大_一、如此是立義過失、何者立義、立_二唯有大義_一、雖_レ然如_二唯四大是色_一、如此唯_二五陰此義已許_一、

若唯陰名人、云何佛世尊、不_レ記_二命者即是身_一、命者異_二於身_一、由_二觀_一問

前別、數論轉變如_二前已遣_一、故彼所引爲_レ喻不成、又許_二蘊生非數取趣_一、則定許_二此異蘊及常_一、又此唯一、蘊體有五、寧不_レ說_二此與蘊有異_一、

大種有_二四造色唯一_一、寧言_二造色不_レ異_二大種_一、是彼宗過、何謂_二彼宗_一、諸計_二造色即大種_一論、設如_二彼見_一應_レ作_二是質_一、如_二諸造色即四大種_一亦應_下即_上_二五蘊_一立_中補特伽羅_上、

若補特伽羅即諸蘊者、世尊何不_レ記_二命者即身_一、觀能問者阿世耶_二故_一、問

とも亦身唯別異なり。數論(Grains-Chan)の轉變を説くことは既に遮せられたり。爾れば此等は充全なる喩にあらず。若し諸蘊は前無き處より生ずなり、補特伽羅は(前無き處より生ずるに)あらずと稱せば、そは(補特伽羅は)それら(蘊)より別異にして又常なりと明かに説示せられたり。蘊は五なり、補特伽羅は一なりと説くが故に云何にして別性なりと説かれざるべきや。

且く「大種(hBryū-Ba)は四なり、色は一にして、大種より色は云何にして別異にあらざるや」との此説は宗(Phyos; 立義)に於て有るなり。何れの宗に於てなるや、唯大種のみなる(と云ふ覺天 Sans-Rgyas-I-ha; の「稱友」)宗に於てなり。其如くなるも而も、大種のみ色なる如く其如く唯蘊のみ補特伽羅なりと立許するなり。

若し蘊のみ補特伽羅ならば何故に世尊によりて「彼命者こそ身なり、或は別なり」と記(Tun-Ston-Pa)せられざりしや。問者の意樂

人意、是故不_レ記、此問人執、有_二一別實物_一名_二命者_一、於_二內是作者、彼人依_レ此爲問、此物必定實無、云何可_レ記_二是一是異_一、譬如龜毛強澁輭滑、此結宿舊諸師先已解釋、有大德那伽斯那阿羅漢、旻隣陀王、至大德所說云、我今欲問大德、沙門多漫言、如我所問、若大德直答、我當問大德、大德言、王但問、王卽問、命者爲_二卽是身_一、爲_二命者_一異身、大德言、此義非_レ所記、王言、大德、我先爲_二不令大德立誓耶_一、謂不應說別語、我有_二別語_一、此義非_レ可語、大德言、我今

者執_二一內用士夫體實非_一虛名爲_二命_一、依_レ此問佛與身一異、此都無故、一異不_レ成、云何與身可_レ記_二一異、如不_レ可_レ記_一龜毛鞞輭、古昔諸師已解_二斯結_一、昔有大德名曰龍軍、三明六通具八解脫、于時有一畢隣陀王、至大德所作如是說、我今來意欲_レ請所疑、然諸沙門性好_二多語_一、尊能直答、我當請問、大德受請、王卽問言、命者與身爲_二一爲異_一、大德答言、此不_レ應記、王言、豈不_二先有要耶_一、今何異言不_レ答所問、大德質曰、我欲問疑、然諸國王性好_二多語_一、王能

に觀待するが故なり。彼(問者)によりて、「内の作者たる士夫は一の命者の實物なるや」と問はれたり。而もそれ(命者)都て無なる時、此は云何にして別異性或は別異にあらざる性なりと記せらるべきや、雌龜の毛は剛なりや輭なるやと謂はるゝ如し。此結は又唯古昔の人々等によりて解かれ畢れり。彌隣陀王 (Rgyat-po Nes-tu-shyin) は上座 (gNa-p-Rtan) の龍軍 (Khu-Sde) の傍に來りて、「大德よ、諸比丘は多語なり。若し我によりて問はれたる所を正に答へ給はゞ、我は問はん」と欲す」と言へり。「問い給へ」と言はれたる時、「云何、彼の命は卽身なりや、或は命も別異にして身も亦別なりや」と(王によりて)問はれたり。上座によりて「此は答の與へられざるべきものなり」と言はれたり、而して彼(王)によりて言はれたり。「我によりて前より、大德よ、異(言)すべからずと約束を求めしにあらずや。何故に、此の語に於て「此は答の與へられざるべきものなり」と異(言)のみを云ふや」。上

欲問大王、諸王多慢言、如我所問、王若直答、我當問王、王言、大德但問、大德即問、於王內中菴羅樹、此子爲酸爲甜、王言我內中無菴羅樹、大德言、大王、我先爲不令王立誓耶、謂不應說別語、王言、我說何別語、我內中無菴羅樹、樹既無云何得記子味酸甜、大王、如此命者既無、我云何能記異身不異身、

云何佛世尊、不直記無我、由佛觀問人意、故不直記、何以故、是諸陰相續、立名命者、勿

直答、我當發問、王便受教、大德問言、大王宮中諸菴羅樹、所生果味爲酢爲甘、王言、宮中本無此樹、大德復責、先無要耶、今何異言不答所問、王言、宮內此樹既無、寧可答言果味甘酢、大德誨曰、命者亦無、如何可言與身一異、

佛何不記命者都無、亦觀問者阿世耶故、問者或於諸蘊相續謂爲命者、依之發問、世尊

座によりて言はれたり、「大王よ、諸王は多言なり。若し（余によりて）問はれたる所を正しく答へ給はゞ、我も亦問はんと欲す」。「問い給へ」と言れたる時、「汝の宮中に菴摩羅果の樹有り、その樹の諸果は酸なりや或は甘なりや云何」と問はれたり。（王によりて）「我が宮中には菴摩羅樹は都て無し」と言はれたり。（上座によりて言はれたり）「我によりて前より、大王よ、異（言）に記すべからずと約束を乞ひしにあらずや、何故に此語に於て「菴摩羅樹無し」と唯異（言）を云ふや」。彼によりて言はれたり、「云何にして（宮中に）樹無くして諸果の酸或は甘なる性質は記せらるべきや。」大王よ、その如く彼命者無き時は、何故に此は身より別なるものなり或は別にあらざるものなりと記せらるべきやと言はるゝ如し。

何故に世尊によりても亦「唯無なり」と説かれざりしや、問者の意樂に待するが故なり。（問者によりて、命者と言はるゝ蘊の相續なるものも亦無なりと解了せられたらんには

問人由執此不有墮於邪見、是故不說、由彼未通達十二緣生理故、是故彼非受此正說器、復次由此道理應決此義、爲是由世尊說、此言阿難、跋婆同姓外道問我、我爲有爲不有、我不答、若說此言、爲非相應耶、謂一切法無我、阿難、若我答跋婆同姓外道問、說一切法無我、此外道於先已在癡闇、爲不下更過前量入中癡闇上耶、昔時我有我、今時永無我、若執有我則墮常見、若執無我則墮斷見、廣說如經、

此中說偈

若答命者都無、彼墮邪見、故佛不說、彼未能了緣起理故、非受正法器、不爲說假有、理必應爾、世尊說故、如世尊告阿難陀言、有姓筏蹉出家外道、來至我所作是問言、我於世間爲有非有、我不爲記、所以者何、若記爲有違法真理、以一切法皆無我故、若記爲無增彼愚惑、彼便謂我先有今無、對執有愚此愚更甚、謂執有我則墮常邊、若執無我便墮斷邊、此二輕重如經廣說、

依如是義故有頌曰

邪見に墮すべし。緣起 (Rten-Cin lāBrel-Bar lByun-Ba) を知らざるが故なり。又彼はその教に堪えざるものなり。此は世尊によりて、[阿難陀よ、筏蹉 (gNas-Pa; Vāstu) と姓の同じき遍行者によりて問が問はれたり。(爾時若し我によりて) 我有りと記せられたるならば一切法は無我なるが故に語正しからざるにあらずや。阿難陀よ、筏蹉と姓の同じき遍行者によりて問が問はれたり、(爾時若し我によりて) 我無なりと記せられたるならば、筏蹉と姓の同じき遍行者には前より愚惑 (Kun-ti-rmaṃs) 有るに由りて、我は先に有りたるに今は我無しとて愚惑は後に増長すべきにあらずや。阿難陀よ、我有りと言はるゝは常邊 (Rtag-Pahi-Mthah) なるべし。阿難陀よ、我無しと言はるゝは斷邊 (Chad-Pahi-mThah) となるべし」と廣く説かれたる所の此(經)によりても亦その如く決定して執持せよ。

此に就いて (拘摩羅邏多 Gshon-Mu-I-en; kmāralabdha) によりて || 稱友 || 言はれたり。

觀_三見_レ牙傷_レ身
及棄_二捨善業_一
諸佛說_二正法_一
如_二雌虎銜_レ子_一。
若信_二說有_レ我
見_レ牙傷徹_レ身
若棄_二假名我_一
善子即墮落

復說_レ偈言

由_二入實無_レ故
佛不_レ記_二一異_一
亦不_レ得_レ說無_レ
勿_レ執_レ無_レ假我_一。
是陰相續中
有_二善惡果理_一
說_二命者_一撥無_レ
由_レ說_レ無_二命者_一。
彼人未_レ堪_レ受_三
正說_二眞空理_一

觀_三爲_レ見所傷
及壞_二諸善業_一
故佛說_二正法_一
如_二牝虎銜_レ子_一。
執_二眞我_一爲_レ有
則爲_二見牙_一傷
撥_二俗我_一爲_レ無
便壞_二善業子_一

復說_レ頌曰

由_二實命者無_レ
佛不_レ言_二一異_一
恐_レ撥_二無假我_一
亦不_レ說_二都無_一。
謂蘊相續中
有_二業果命者_一
若說_二無_二命者_一
彼撥_二此爲_レ無_一。
不_レ說_二諸蘊中_一
有_二假名命者_一

又言はれたり。

見の牙によりて傷けらるゝと
諸業を壞するを觀するが故に
牝虎によりて子の運ばるゝが如く
王(佛)によりて法は説かれたり。
我は有なりと認許せらるゝによりて
見の牙の爲に傷けらるべし
世俗 (kūn-Rtsob) (我)覺知せられざるに
よりて
善(業)の子を傷害すべし。

無なるが故に世尊によりて、命者
そのものは別なりと説かれざるなり
假設なかるべきを怖るゝが故に
無なりとも猶説かれざりき。
蘊の相續中に於て善と
不善との果有り
そこに命者と名けらるべし
命者無しと敎示せらるゝによりては無
となるべし。
命者と曰はるゝは蘊の中に

問「有我無我」
故不答「我無」。
若由觀「問意」
於「有何不記」
同前無「涅槃」
墮難故不記。

由觀「發問者」
無力解「真空」。
如是觀「筏蹉」
意樂差別故
彼問「有無我」
佛不答「有無」。

唯施設せられたりとも亦説かれざりき
彼壽の生者もそれと同じ
眞空(Shunyata)を解する分有るにあらず
かくの如く筏蹉によりて、我有りや
無しやと問はれたる間の
意樂を見て説かれざりき
有ならば何故に有りと説かれざるべき。